

芭蕉の方向感覚

——黒羽滞留中のフィクションの実態について——

横 山 邦 治

芭蕉は、百五十日という長い日数の旅である「奥の細道」の行脚で、那珂川上流の黒羽の城下町（大関氏一万八千石、当代の城主大関有恒は幼少で在江戸）で、陣代家老浄坊寺図書高勝（俳号秋鴉）と鹿子畑善太夫豊明（俳号翠桃）という年若き兄弟（鹿子畑家から養子入りした図書は当時二十九才、翠桃は二十八才という、若いと言えるかどうかは別として、当時の結婚年令の在り方から申せば、芭蕉の子供と言っても差し支えないであろう）の心からなる歓待を受けたらしく、旧暦の四月三日より十六日まで、実に十四日間の長逗留を重ねている。随行日記を検するに、秋鴉宅に実に九夜、翠桃宅には五夜の宿をしている、著名な歌枕とてない小さな城下町に長逗留したのは、図書たちこの地方では名族たる人々の心からなる歓待を受けたからであつたらう。それかあらぬか「奥の細道」での黒羽の描写は精細であるが、その記述順序において随行日記と対比した場合に大変大きな変移が見られる。それについては「奥の細道」のフィクシ

ョン性の好例として論じられるところであるが、井本農一の「奥の細道に於けるフィクション」（『国文学—解釋と鑑賞』昭和二十六年秋、『俳文芸の論』明治書院昭和二十八年一月所収）の論述が確論のごとくに認定されているのである。

井本説に依れば、「夏山に」と「木啄も」の句の在り様に着目して、この二句の布置よろしきを得さしめるために、「黒羽関係を前段にまとめて書き、雲巖寺関係を後段にまとめて書く必要が生じ」て、「事実の時間的系列を崩したというのである。その結果として、句の文との布置よろしきを得ておることがこの俳諧的紀行を文學的に價值あらしめる所以にもなつておるのである。」とあつて、黒羽でのフィクションは、「奥の細道」の俳諧的紀行文としての価値を高める効能があるとされるのである。この井本説に従えば、句と文との布置関係は文學的に十二分に説明されるごとくであるが、「一日郊外に逍遙して」（一）犬追物、

（二）那須篠原、（三）玉藻の前の古墳、（四）八幡宮とい

う順番で経廻っているというフィクションの説明が十分に出来ているとは思えないのである。ここは文学的というのではなくて、今少し即物的に考えてみる必要があるのではないかと思うのである。

随行日記に従って黒羽での芭蕉の行動を辿ってみると次のようである。

一 同三日 快晴。辰上尅、玉入ヲ立。

鷹内へ二リ八丁。鷹内をヤイタへ巻リニ近シ。ヤイタヨリ沢村へ巻リ。沢村ヨリ太田原へ二リ八丁。太田原ヨリ黒羽根へ三リト云凡ニリ余也。翠桃宅、ヨゼト云所也トテ、式十丁程アトヘモドル也。(早朝玉入を発つて黒羽に直行している、随行日記通りとして九里十六丁、八里十六丁、相当な強行軍である。そして黒羽の町人町に入って翠桃宅の在所を尋ね、余瀬にあるということで黒羽城のある郭内に向う那珂川の渡しを渡らずに逆行、那珂川の支流湯坂川沿いに余瀬に向ったはずである。半里あまりである。翠桃により親しみを感じていたのであろうか。)

一 四日 浄法寺図書へ被招。(翌日には図書宅に移っているが、恐らく兄弟で事前に芭蕉滞在中のことを相談して、豪家である翠桃宅でも滞留不可というのではなかったはずであるが、黒羽城の真近にあつて離室もある図書宅の方で接待することにしていたのであろう。秋鴉主人の佳景に對すとして、山を庭にうごきいる、や夏ざしき、の句を作り(現

在浄坊寺家の旧屋敷の庭先に句碑がある。加藤楸邨の字である)、そして俳諧書留に芭蕉が滞留したであろう亭の讚辞を残している。いずれにせよ、ここに「被招」とあるけれど、一日だけ招かれたのではなく、この後図書宅に滞留したと読み取れる。)

一 五日 雲岩寺見物。朝曇。兩日共二天氣吉。(黒羽で最初の見学は雲岩寺である。恐らく事前に芭蕉から仏頂和尚に参禪していたことを聞かされていて、仏頂和尚を慕う芭蕉の氣持を忖度して、まずは雲岩寺参詣という計画であつたのであろう。雲岩寺参詣についてはかつて触れたことがあるけれど(拙著「奥の細道行脚」一〇一ぺ、平成九年深水社刊)、城代家老様兄弟同道の参詣であるから、しかも往復七里余りの長路であるから尚更、相当の供揃えの御一行様であつたろう。歌枕らしい歌枕も、名所旧跡らしい古蹟も少し黒羽という小城下町であつてみれば、雲岩寺は唯一の目玉商品であつたであらう。芭蕉としては「奥の細道」で特記するのが、図書兄弟の好意に對する応え方であつたであらう。)

一 六日ヨリ九日迄、雨不止。九日、光明寺へ被招。昼ヨリ夜五ツ過迄ニシテ帰ル。(四日間も雨続きである。八日までの三日間を無為に過したというのではなさそう、図書の離室で俳諧のことが語られ興行があつたであらう、俳諧書留にその痕跡が残っている。雲岩寺十景、木啄の句と雲岩寺の景、秋鴉主人の亭への讚辞、白川の関に関する文章

〔奥の細道〕の白河の関の章の前駆的文章と思われるが、

今ままであまり触れられていないようである。光明寺における句「夏山や首途を拜む蕎あしだ」〔奥の細道〕の本文では「夏山に足駄を拜む首途哉」とある）などが見られる。そして九日には図書兄弟の姉が嫁入っている即仏山光明寺（修験道の寺という）に招かれている。この光明寺は翠桃宅からは三、四町の近きなのであるが、図書宅からは相当な距離がある。姉の婚家先として皆の歓迎の気持を表わすための招待で、昼ごろから夕刻まで滞留しているのは、兄弟同士で事前の打ち合せを十二分にした上での招待であったことを示している。そこで芭蕉は、これからの旅の無事を祈る「夏山や」の句を作るのであるが、これも図書たちの歓待に対する挨拶の気持が含まれているのであろう。この後、より近い余瀨の翠桃宅に向わないで、図書宅に帰っているらしいのは、この黒羽での芭蕉接待の主役が浄坊寺図書であったことを示しているであらう。）

一 十日 雨止。日久シテ照。（長雨の後の一時の快晴、この日何をしたのか判らないが、休養の一日であったかも知れない、図書宅でのことで、俳諧好きの客があったかも知れない。）

一 十一日 小雨降る。余瀨翠桃へ帰ル。晩方強雨ス。（ここで図書から翠桃宅に移っている、「帰る」と曾良が表記している意味は判らない。芭蕉主従にとつて翠桃により親しみを感じており、その気持が「帰ル」という表現をとらし

たのであろうか。）

一 十二日 雨止。図書被見廻、篠原被誘引。（図書が実家である鹿子畑家を訪れ、那須の篠原（玉藻前の古墳を含む）の見学に誘ったのである、恐らく篠原と同一方向である蜂巣にある犬追物の跡も見たのであろう。）

一 十三日 天気吉。津久井氏被見廻而、八幡へ参詣被誘引。（津久井氏というのは未詳、姓があるから武士階級の人、図書などと知り合いであらう。金丸八幡に参詣したのであるが、翠桃宅から南金丸にある那須神社まで一キロ少々で、あまり遠出というのではない。）

一 十四日 雨降り、図書被見廻終日。重之内持参。（降雨で翠桃宅で一日過したのであろうが、御馳走持参で図書が訪れている。俳諧の話、土地の四方山話などがなされたのであろう。図書の好意がうかがえる。）

一 十五日 雨止。昼過、翁卜鹿助右同道ニテ図書へ被参。まわらる是ハ昨日約束之故也。予ハ少々持病気故不参。（曾良の持病というのは何であらうか、中山温泉で別れる時「腹を病みて」とあるから胃弱でもあったか、ともあれ曾良は翠桃宅に止まり、芭蕉は図書との約束で鹿子畑の一族と思われる鹿子畑助右衛門と図書宅に向ったのである。別れの挨拶もあり、これからの旅の便宜を頼むこともありであつたらう。約束の内容が何であつたか判らないが、最後の一夜を亭で過すということでもあつたらうか、今一夜の俳諧談義をしたかつた

のかも知れない。))

一 十六日 天気能。翁、館ヨリ余瀨へ被立越^{たちこえらる}。則、同道ニテ余瀨を立。及昼、^{ひるなか} 凶書・弾蔵^{ひるなか}馬人ニ而被送^{ておくら}ル。馬ハ野間ヨリ戻ス。此間式里余。高久ニ至ル。雨降り出ニ依^{より}、滞ル。此間壱里半余。宿角左衛門、^{より} 凶書^{より}ヲ状被添^{そへらる}。

(凶書宅から余瀨の翠桃宅に帰り、そこから曾良と同道で立つ。凶書の好意によって馬が提供されており、野間までの二里余りの道で利用し、更に一里半先の高久では凶書の紹介状で庄屋の家に宿泊している。凶書の好意が隅々まで感じられるのである。)

ここで再説すれば、「奥の細道」で「一日郊外に逍遙して芭蕉が経廻っているのは、「犬追物の跡」「那須の篠原」「玉藻の前の古墳」「八幡宮」である。これは二日間で見学している(十二日と十三日)のであるが、たまたま翠桃宅に滞在中のことである。そこで翠桃宅を基点としてそれらを一日で経廻ることを考えると、距離と方向性から言つて「奥の細道」に描かれたようにたどる外ないと思われる。そのことに關して「方向音痴でなかった」芭蕉が、「地理的に極めて整然と整理記憶」している順序に従つて「記述している」と述べたことがある。(拙著「奥の細道行脚」一四〇ペ)フィクションなのであるが、そのフィクションは文学的とか何とかとは無縁な話で、芭蕉の方向感覚と地理的整理能力の問題なのだといふのである。余瀨の翠桃宅か

ら北西に蜂巣の犬追物の跡を尋ね、更に近くの篠原の玉藻前を祭る古祠を経て、ぐるりと方向転換して南下し湯坂川を越えたと南金丸の那須神社で、そこから更に東に向えば再び余瀨なのである。その正確な地図が芭蕉の脳裏に描かれており、それに従つて描写されたものなのである。恐らく土地の人にとつても「奥の細道」の描写はフィクションとは感じられない表現であつたのではないであらうか。

芭蕉が方向音痴であつたかどうか、私は知らないが、「奥の細道」で方向を示す言葉は象潟の章で「東北の方」「南」(実は東南)、「西」(実は西南)、「東」(実は東北)、「北」(実は西)とあるのが唯一の例(松島の章で「東南より海を入れて」とあり、最上川の章で「板敷山の北を流て」とあるが、極めて概念的表現であつて、正確な方向性を示すものではない)で、それはむしろ芭蕉の方向音痴を示す例として挙げられ得るものである。確かに象潟の章の例は、「千満珠寺」の「方丈」からの景としては実情に反しており、意識的に東西南北を配して景色を記述しようという意図は汲み取れるけれど、いかほどか方向感覚に疑念を抱かせるものではあつた。

ところでこの外に「奥の細道」で方向を示す言葉として、「右」「左」の語が頻出する。最上川の章で「左右山覆ひ」とある例を含めて、右五例、左五例である。松島の章で島々の描写で「あるは二重に重なり三重に疊みて、左に分かれ

右に連なる」とあるのが、方向を示すというより描写の技巧と称すべきであるのと最上川の章の表現は同等であるが、それ以外は全て方向を示す表現である。そしてその方向性は実態に徴して極めて正確である、ただ一例、笠島の章の藤中將実方の塚を尋ねるところ「人に問へば、「これより遙か右に見ゆる山際の里を、蓑輪・笠島といひ、道祖神の社・形見の薄今にあり」と教ふ」の「右」が実態と逆方向であるという問題がある。仙台方面から来た人が教えた言葉だから右でよいという説もあるが、一般には誤用説が多いようである。誤用ということになると、芭蕉の方向感覚という点から言えば、否定的と言う外ないのである。芭蕉は方向性について痴であったから、左を右としてもあまり気かけなかつたのであろうなどという類推である。私自身は、「これより」から「今にあり」までを「」でくくって、仙台方面から来た人の芭蕉主従の質問に答えた言葉と解して、「右」という言葉が正確であったと解する考え方に賛成である。芭蕉の詩人としての感覚は、言葉についても鋭敏であつたはずで、問答の相手の言葉は正確に印象的に記憶していた公算が大きいのである。その記憶していた言葉を、そこで発せられたであろう「右」という言葉を、自分の方向から考えて「左」とあるべきだからと言葉を変える必要はないのである。とするとこの「右」は誤用と考えるべきではないのであり、まして芭蕉の方向感覚を否

定する例と考える必要もないのである。

と言つても象潟の章における東西南北の誤用は気にかかるところではある。ここで一般論として考えてみよう、初めて訪れた土地で道を尋ねた時に、東西南北の方向指示語で説明されて困った人は多いはずである。「その十字路を西に行つて、二番目の信号のところを北に行けばいいですよ」と言われて、すぐ了解する人がいるであろうか。太陽が出る方向が東で、太陽が沈む方向が西だということは周知のことであり、その土地に住んでいる人にとっては自明のこととしてその方向性が正確に認識されているはずであるが、その土地が始めての人にその認識を求めても無理というものである。まして曇天でもあつてみれば、皆目見当もつかないであろう。それが、「その十字路を左に行つて、二番目の信号のところを右に行けばいいですよ」と教えられると、大ていの人が直観的に体感的に判るはずである。方向指示の言葉としては、東西南北といういかにも方向指示語らしい言葉よりも、右と左と言う言葉は一層基本的方向指示語と言つていいであろう。その指示語が、「奥の細道」において極めて正確であることは、芭蕉の方向感覚の正確さとその記憶力の正しさを証するとしてよいと思われる。その芭蕉の方向感覚によつて、黒羽周遊のフィクション描写はなされているのであり、いかにも実際にあり得たフィクションなのである。恐らくここに描かれた犬

追物の跡から金丸八幡に至る経路以外に道はなかったであろう。芭蕉は実際にそのように行動はしていなかったのであるが、フィクションなのではあるが、「一日郊外に逍遙して」という前提を置くと、こういう経路を辿るのが実際的であると、芭蕉の方向感覚は知っていたのである。

このような芭蕉の現実感覚があつて始めて、「奥の細道」のリアリティは実現化されるのである。

(平成九年八月十八日成稿)

(追記)

中国は大連の地に、平成九年八月末日から流残の身であります。「鈴張往来」は「大連往来」となるべきであります。鈴張という土地に生まれ育つて、基本的に鈴張から離れて生活したことがない、極端に行動範囲の狭隘な私にとりましては、正に前代未聞、驚動天地の出来事でありまして、この稿の校正をしております十一月末日までの三ヶ月間は、毎日が新体験と珍行動の連続であり、それを往來化したしますと忽ち一冊の本になるであろうと思うことです。事実、大連という異郷で、言葉が通じない土地で一人暮らしによる人恋しさがなせるわざか、時間に余裕があるせいなのでもありませんか、この三ヶ月間に身内の者や友人たちに出した手紙の量は膨大で、私にとりましては若い頃にラブレターを作成した時以来の大量発信となりま

した。そしてありがたくも往來発信という行為は、近代的電話(実は最初の一週間で九百九十七元也という請求書が突き付けられ、当地における指南役たる高曉華さんから、私の一ヶ月半の給料分ですヨ、もう日本に電話をかけるのは止めなさい、その代わりに手紙を書きなさいと叱られての結果による手紙大量生産かも知れません。)よりも心を素直に通じ合えるものがあると再認識していることでもあります。ともあれ今少し落着きますれば、私的「大連往来」も発信できるかと存じます。中国大陸の北の窓口たる大連にあつて、この三十年来抱き続けた異郷に遺された日本の書物探索という素志を少しでも実現しながら、自己再生を願って生きていることを報告しておきます。流寓先は左記のごとし、中国大連市中山区南山路一一〇號大連外国語学院專家楼南楼二二一房間。專家楼と言うと大層であります。江戸の八っあん熊さんの長屋のごとくで極めて庶民的にして中国的アパートであります。一応二DKと申すべきであります。台所の様子は江戸的に水と火が隔離されており、火は古典的ガスパナーであります。基本的に雨の少ない乾燥地帯なのに、壁面には時にピカソの絵的カビ模様が見れているので、これはスチーム暖房の結果生じる結露がもたらすものでありましょうか。冗舌は例によって切りがなくなりそうです。一まずはここで追記は終わりであります。

(二月一日)